

いわき市の文化財



阿弥陀堂(白水阿弥陀堂) 一棟

指定 昭和二十七年三月二十九日

所在地 いわき市内郷白水町広畑

所有者 願成寺

平安時代末期

一面の長さ 九・四〇m

床面積 八八・三六㎡

白水阿弥陀堂は、願成寺に伝わる文献や、仏壇下から発見された古材墨書から平安時代の末期に建立されたと考えられる。

当時は浄土信仰の隆盛に伴い、末法思想が全国に普及し、極楽をこの世に具現したものととして、浄土式庭園を伴った阿弥陀堂が建てられた。

明治維新後の神仏分離令で荒廃した時期もあったが、明治三十七年(一九〇四)の解体修理により茅葺屋根が榎茸に変更され、昭和三十一年(一九五六)には半解体保存修理が行われ現在に至っている。

一間四面堂で、中心一間の身舎と入側縁と外廻縁で構成される。屋根は二軒化粧垂木の宝形造り、頂上には露盤、宝珠があり、特に屋根の勾配が大きく、床下には亀腹が設けられている。直径三八・五九cmの身舎柱四本の円柱内に黒漆塗の和様組高欄付須弥壇が置かれ、本尊阿弥陀如来像をはじめ国指定重要文化財の仏像五体が安置されている。周囲一間の外陣側柱の柱上には和様一手先斗棋が組まれ、天井は内陣、外陣とも折上小組格天井であるが外陣天井は後から加えられたらしい。内陣天井や長押などには宝相華や経綫彩色が描いてあり、本尊背後の来迎壁、西側の板壁にも彩画の痕がある。

平安時代後期の浄土教の盛んな時、数多くの阿弥陀堂が建立されたが、現存する東北の一間四面堂として、岩手県の中尊寺金色堂(天治元年・一一二四)や宮城県の高蔵寺阿弥陀堂(治承元年・一一七七)とともに貴重な建造物である。



飯野八幡宮 七棟

指 定 昭和五十八年一月七日

所在地 いわき市平字八幡小路

本 殿
所有者 飯野八幡宮

江戸時代初期
桁行 六・二〇m、梁間 六・三六m
床面積 三九・四六㎡

現在の本殿は元和元年(一六一五)に着工し、翌二年に上棟したことが床下の柱に記された墨書銘から明らかである。また、延宝三年(二六七五)には増改築が行われた。

屋根は入母屋造り平入りの柿葺きになっているが、当初は前室付三間社流造りであった。平間は内々陣、内陣、外陣の三室よりなり、円柱と角柱の組み合わせになる。床は高く、三方廻縁に列組高欄、脇障子を付けている。組物は柱上に台輪を回した和様三手先組、外陣は正面の角柱を短くして台輪、頭貫を二重に、その中間に三斗を置き、木鼻は三段に重なっている。その中備は正面が肩にひれ付きの中世風纂股で、側面は近世風である。軒は格組天井に蛇腹支輪で、二軒繁垂木の地垂木には強い反りがある。柱間は正面中央が棧唐戸で、内陣と外陣境は黒漆塗りに金箔押の板唐戸である。両脇と両側面の前縁は引違いの吹寄せ舞良戸、内陣の東側は板遣戸で他は板壁である。外陣の格天井の格間には花が描いてある。正面階段の擬宝珠には延宝三年の銘がみられる。

平成五年、半解体修理工事を行い現在にいたる。福島県浜通りの建立年代の明確な近世初期の壮大な社殿であり、磐城地方における貴重な神社建築である。



若宮八幡神社本殿

江戸時代

床面積 一〇・〇〇㎡

本殿瑞垣の外、向かって左側に仮殿、右側に若宮八幡神社が位置する。仮殿創建に引き続いて、平澤内匠助が元和五年（一六一九）に完成した記録がある。仮殿と同規模の建物で、仮殿は角柱を使うのに対して円柱を使っていることや、前殿が付いていたことでも一間社流造り前殿付きの本格的な建物であることが分かる。

様式は素木造りの建物で、妻飾りは虹梁に大瓶束を建て、木鼻がつき、大斗、肘木で棟木を受け、拝みに無懸魚、二軒繁垂木、向拝柱上斗、椽と実肘木と墓股で桁を受け、破風に猪目懸魚が付く。向拝柱角柱面子木鼻付き、身舎本柱は円柱、天井は棹縁天井、軸部は柱下礎石に地貫、腰貫、内法貫で組み、地覆長押、内法長押付となる。平面は一間社流れに脇障子が付き、拭板床張り、木階七段に石段が一段付き、正面本扉軸板扉付内側に彩色絵、小脇羽目、幣軸方立付き、三方刳高欄付切目縁、向かって右側に遣戸が付く。妻側横板貼内側より目板打ち、床下周囲は豎板目板貼りとなる。

正保二年（一六四五）、宝暦九年（一七五九）などの屋根替えの記録があり、平成十一年の保存修理に際し向切妻屋根（流し板葺き）の前殿が復元された。



飯殿

江戸時代初期

身舎桁行 二・四二m、身舎梁間 二・一八m

床面積 一〇・〇二㎡

この建物は「八幡宮萬御造宮之帳」の記載から、慶長十九年（六一四）正月二十八日に隣家の火災から類焼した本殿の飯殿として建てられたことが知られる。大工四十二人、京銭一貫六三文を費やして翌月の二月二十三日に仕上がった。大工は本殿の造営に当たった平澤内匠助である。本殿の西、玉垣の外に南面し、現在は神輿を収めている。

素木造りの一間社流造で、屋根はトタン板葺（元板葺き）、柱は自然礎石上に建つ。背面をのぞく三面に高欄付切目縁を廻らし、脇障子を立てている。正面に木階四段と石階をおき、柱はすべて面取り角柱で、繫虹梁で向拝柱と連結する。向拝柱上には舟肘木で軒桁を支える。身舎の角柱は頭貫、腰貫、地貫を通し、内法長押、地覆長押を廻して固める。軒は疎垂木で向拝垂木は打越とする。妻飾りは、虹梁に角の大瓶束を立て舟肘木で棟木を受ける。内部は竿縁天井、床は板張り、正面に両開きの板扉、右側に板貼片引戸を建て、外壁は豎板目板貼りとする。

小屋裏内側の大瓶束に寛文十三年（二六七三）の修理銘があり、修理した大工は楼門造営に関与した平澤儀左衛門であることが判る。彼は寛文五年（一六六五）に、橋葉町に現存する木戸八幡神社の本殿造営に関わっており、その本殿板壁に「平飯野八幡宮宮大工平澤儀左衛門清貞」の墨書銘を残している。

建築様式の明らかかな近世初頭の神社建築として貴重である。



神楽殿

江戸時代初期

桁行 四・五四m、梁間 四・五四m

床面積 二〇・六一㎡

この神楽殿は、『八幡宮御造営之帳』（慶長十九年～寛永十九年（一六四四～一七四二）に「元和九年（一六三三）ちこまい堂すたて造作まで大工之作料金子貳分二しきる也」と記載がある。

規模は柱間二・二七m、高さ七・一mの方二間である。屋根は入母屋造りで、鉄板葺き（元は柿葺き）。四方吹き抜けの舞殿である。

唐門と接し拝殿の左前方に北面して位置する。自然石の基礎に杏建て地覆を四周に廻す。栗材の面取り角柱に梁桁でつなぎ、腰長押と貫で固める。正面に虹梁を渡し吹放す。床は板張り、格天井とし、天井鏡板に彩色の痕跡をのこす。

背側三方の腰長押の位置に櫃を入れ、床下廻りを腰板張り、妻破風板に懸魚六葉を飾る。平面裏側に控え室らしい空間の穴が見うけられる。

寛永十三年（一六三六）、宝暦十一年（一七六一）など度々屋根修理が繰り返され、『磐城志』（文政九年（一八二七）によると「二間四面、入母屋作七尺五寸間神楽殿」の記録があり、当初の形態を引き継ぐ貴重な建物である。



唐門からもん

江戸時代

高さ 三・七五m
桁行 二・四二m
梁行・控柱間 一・七五m

この唐門は境内の中門で、神楽殿と並び玉垣で本殿と楼門を仕切る一間一戸の水門である。

屋根は銅板本瓦葺き(元は柿葺き)、基礎は造出し花崗岩で、二本の円柱を四本の角控柱で支える。円柱は頂部を細めるいわゆる粽むすびとし、それに虹梁を架け渡し木鼻が付き、藤二つ巴紋ふじにふつうまの半肉彫板ひしりょうぼんの裏股うらまたで斗拱を受け、主柱二本を蹴放して連絡する。軒は一軒本繁垂木ひとけんぼんしげで化粧屋根裏の造作は極めて技巧的であり、妻側の平唐破風ひらからやまには兔毛通しが付き、円柱頭部に笏形を飾る。柱には方立かたたち、藁座を付け、内両開きの八双金具飾棧唐戸を吊る。

『八幡宮御造営之帳』には「寛永八年(一六三一)…八幡宮御門建申事云々」とあるが、この御門は本殿前の門と考えられ、元禄十六年(一七〇三)拝殿建設と、宝永二年(一七〇五)幣殿建設の際に、水門玉垣が造られたと考えられる。記録には延享三年(一七四六)唐門と具体的に表現され、近世初期から中期にかけて造られたと思われる。宝暦十一年(一七六一)の修理記録には「唐門」と有り、文政九年(一八二六)には「表八尺、妻六尺唐破風柿葺」と記録がある。

この建物は神社の神籬ひしりの出入口であり、屋根付き玉垣で仕切った中門で、卓越した技法を見ることが出来る唯一の唐門である。



楼門

江戸時代初期

- 初層桁行 六・三六m
- 初層梁間 三・六三m
- 二層桁行 五・九九m
- 二層梁間 三・二七m

この楼門は三間一戸楼門の入母屋造りで、境内入口の門である。明治初めまで正面に仁王像が収められていたが、神仏分離令により改められた後は、隨身像が安置されている。

建立は万治元年(二六五八)で、大工儀左衛門が普請に携った銘文が、上層内部の柱に墨書で記録されている。また元禄十年(二六九七)に平澤清兵衛が、享保十年(一七二五)には平澤利右衛門が修理に携わっている。

白御影石造出基礎上に南面して建つ。屋根は銅板一文字葺き(元は柿葺き)で、妻飾りは二層入母屋台輪に家紋首を組み、押みに蕪懸魚を吊る。二層の軒は、二手先の出組で斗拱支輪が付き、床は総板張りで、四周縁に高欄が付く。柱間装置は間斗束が、板壁には青瑣が用いられ、縁腰組は四手先出組斗拱となる。主柱は八角柱であるが、二層柱は円柱である。初層は地貫・腰貫・頭貫・冠木・虹梁・水平隅木で組まれ、中間には戸がなく吹き放して蹴放しの唐居敷で受ける。両側の前後一間は阿迫板壁である。

屋根修復の柿葺きの墨書銘から分かるように、数度の修理を経て現在に至っている。平成の大修理で内法長押の菱撃ぎ四つ花文や、臺股等に極彩色が施され、総朱漆塗りの秀麗な楼門が再現された。

近世初頭の楼門建築遺構として貴重である。



宝蔵

江戸時代・正保三年(二六四六)
桁行 五・四五m、梁間 二・七九m
床面積 一五・三七㎡

飯野八幡宮宝蔵は、拜殿西側の玉垣の外に東面して建てられている。高さ四・八mの平屋建て、寄棟造りの本瓦葺き土蔵である。外側は全面本漆喰塗込みの大壁で、腰に平瓦貼りの海鼠目地漆喰塗りで固めている。入口は肩付き虹梁漆喰い仕上げに、石階は煙返しで、基礎は御影石の布基礎となっている。内部は角柱を立て、床・壁共に板張りになっており、天井は竿縁天井である。屋根は丸瓦を青海波状に積んで大棟とし、鬼瓦は風鎮形に下り藤の紋を入れ、軒丸瓦は巴紋の土瓦、軒平は唐草紋の陶器瓦で、軒丸の数枚には藤二つ巴紋が使われている。これは宮司飯野家の紋で、唐門の蓑股や諸道具にも、この紋様が使用されている。

この建物は防火を目的として、化粧垂木まで本漆喰塗にした本造りの土蔵である。

平成二十年から平成二十三年にかけて行われた修理によって、北面軒桁の北西隅組手北面から正保三年(二六四六)の墨書が発見され、建築年が明らかとなった。また、宝蔵の屋根内部隅木の墨書銘に「寛文四年五月(二六六四)葺きがい」と書かれており延宝五年八月(二六七六)の『飯野八幡宮射具記』(市指定)には「八幡宮神庫」と記されている。また寛政二年(一七九〇)に「神庫但し瓦葺表三間妻九尺」の記述がある。



専称寺 三棟

指定 平成十六年七月六日

所在地 いわき市平山崎字梅福山

所有者 専称寺

本堂

江戸時代・寛文十一年(一六七二)

床面積 三五四・六四㎡

梅福山報恩院専称寺は、太平洋を望む風光明媚な東傾斜地に伽藍配置された、浄土宗名越派の総本山檀林寺であった。成蓮社良就上人十聲が創建建立した応永二年(一三五五)から、この地に連綿と続いている寺で、現在は梅の名勝地として、いわき市民に広く知られている。山門を潜り本堂に向かって右側に庫裏、左側に開山堂が配され、山門外の右下には袴腰鐘楼がある。寛文八年(一六六八)に伽藍の大部分が焼失した記録が残されている。

本堂の様式は、正面切石積の上に木造平家建平入向拝付きの方丈形式で、屋根は鉄板瓦葺き平成二十三年からの解体修理により銅板葺となる予定)入母屋造りとなる。間取りは当時の記録と同じく、桁行二二・一一mに梁間一七・八一mの身舎に向拝が付き、渡り廊下で各棟に接続している。小屋組は二軒化粧疎垂木を平三斗で支え、外壁は軸組に土壁塗り、仕上に白漆喰を塗り、腰は板壁を和釘打ちしている。堂内は外陣と内陣の境を円柱で仕切り、須彌壇のある内陣は円柱で結果を図り、内陣脇間と廻縁の境は角柱になる。畳敷きの外陣と板敷広縁が角柱となり、繋ぎ渡り廊下に接する。落縁も切目拭板敷きとなる。内々陣境界は上げ敷居の格子戸、内陣脇間は引き違い戸で結果する。内部構造彫刻には、平三斗、大瓶束、笈形付大瓶束、蓑束等で生まれ、組欄間や彫刻欄間等が付随する。須彌壇上に厨子を置き、天井は折上格天井になっている。

現在の本堂は寛文十一年(一六七二)に、当山十六世欣蓮社良上人の代に、矢吹六左衛門徳昌の努力により再建されたものである。



庫裏

江戸時代
桁行 一八・二m、梁間 一〇・三m

庫裏と言われているこの建物は、本堂に向かって右側に位置し、廊下で本堂に接続している。火災による伽藍焼失後、専称寺第十九世良弘上人曇星の代に、方丈、庫裏、合わせて二十一間の再建が行なわれた。また、明治四十一年(一九〇八)から大正元年(一九一二)にかけて総修築が行われ、現在の形に修造されたと思われる。

この建物は、木造平家建の茅葺き寄棟造りの建物で、玄関・廊下・床の間・仏間位牌の間・奥行き半間に間口二間付の十二畳の仏間・落縁・土間で部屋割される。土間の上部に現在には中二階が作られているが、創建当時は物揚天井であったと考えられる。

基礎は杵柱建て、一部土台敷である。外壁は漆喰塗りで、腰に彫子下見板を貼る。前面に内法一・七二七m(五・七尺)の二筋鴨居が付き、高さ〇・九六九m(三・二尺)の二枚引き違い硝子窓が付けられている。前面には近年復元修理された、向唐破風平瓦葺きの朱塗り平入の玄関が付き、後側の下屋も同様に平瓦葺きである。

総体的にみると食堂的要素の強い建物であり、改修痕跡から数回にわたる修理が行われてきたことが分かり、生活環境の変化に伴い間取が改造された様子が伺える。江戸時代初期から中期に至る過渡期の、大規模な庫裏として重要な建物である。



総門

近世前期

桁行 三・三六m

梁間 二・八一m

修理前の総門は、桁行一間、梁間一間で屋根切妻造、棧瓦葺であった。建立当時は詳かでないが、細部に近世前期の意匠がみられる。正面側柱を円柱、後柱を面取方柱とし、柱上に台輪を廻らし、三斗を組み、中備に平三斗を配し、竿縁天井を張る。妻は虹梁中央に臺股を置き三斗を介して棟を支持する。

平面は薬医門と同じであるが、台輪を四周に廻し棟を前後柱の中央に置くなど特異な形態となっている。

解体中に発見された扁額の墨書から明治三十五年（一九〇二）に茅葺から棧瓦葺に葺き替えられ、その後、昭和二十三年（一九四八）七月にも瓦の葺替工事を行った事が分かった。

平成二十三年からの解体修理の検証結果に基づき、門は建立当初の形式にして、正面桁行中央間の扉構えを復旧した。ただし、屋根は管理上、茅葺型銅板葺に整えられた。



絹本着色彌勒菩薩像 一幅

指 定 明治三十九年四月十四日

所在地 いわき市四倉町葉王寺字塙

所有者 葉王寺

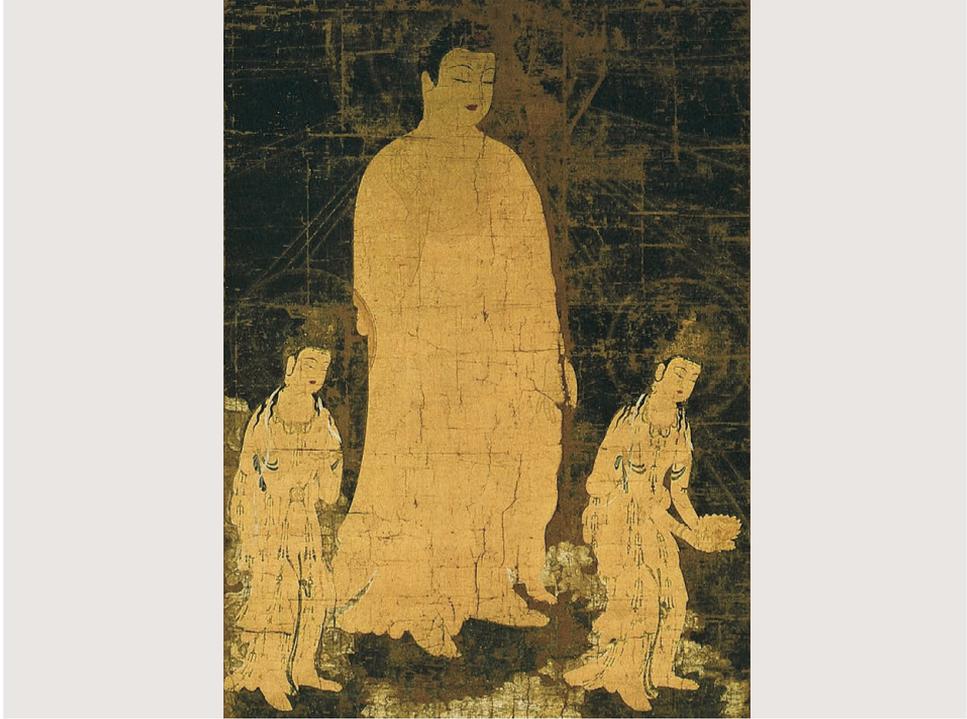
鎌倉時代後期(十三世紀)

縦 一五五cm、横 五八・八cm

彌勒菩薩は梵名を阿逸多菩薩といひ、釈迦の滅後、五六億七千万年に再びこの世界に出現して、華林園内の竜華樹の下で成道し、三会の説法をして、釈迦の救済に漏れた人々を濟度するといふ未來仏である。

本図は彌勒菩薩独尊來迎図で、雲に乗つて下降する立像を描いている。その姿は結髪して、髻を高く結び、前立式の大きな宝冠をいただし、中に化仏をおく。身には如来形のごとく袈裟・祇支・裳をまとい、また耳瑠・瓔珞・腕釧・足釧を飾る。右手は軽く肘を曲げて垂下し、五指を伸ばし、掌を前にあらわす。左手には蓮の茎をとり、頂上の蓮華の上には彌勒菩薩の標識である宝冠(五輪塔)をのせている。両足はやや開き、右足を半歩前に進め、踏割蓮台に立っている。蓮台の下には雲がうず巻き、長く尾を後方に引いて速度をあらわしている。頭部の後方には円相の頭光と、二一本の光芒がはなたれている。衲衣には麻の葉と、截金の文様が施されている。肉身部から着衣の部分におかれた金箔や彩色はかなり剥落しており、面相のいたみは特に激しいが、その下から力強い墨の描線が見える。

仏体が彌勒であるために珍しい図相というべきであろうが、光芒の様子、着衣の衣文のさばき具合、蓮台や雲の描写はすでに定型化した來迎図の形式であり、絵絹の仕立ては二幅一鋪である。この図相や描写からみて、その成立は鎌倉時代後期と思われる。



絹本着色阿弥陀三尊像 一幅

指定 大正四年三月二十六日

所在地 東京国立博物館(寄託中)

所有者 いわき市

鎌倉時代後期(十三世紀)

総縦 三三・五cm、総横 一六六・八cm

本地縦 二四三cm、本地横 一四二cm

本図は阿弥陀三尊の立像来迎図で、阿弥陀如来は画面の中央に少し横向きで踏割蓮台に立っている。その前方右の観世音菩薩は腰をかかめて蓮台をささげている。左の勢至菩薩も少し腰をかかめて合掌している。両菩薩は踏割蓮台に立ち、本尊とともに雲に乗って往生者の所へ降りて来る様子を示している。三尊ともに皆金色像である。画面の虚空部は群青を塗り、三尊の肉身は金泥地に朱墨の肉線を描き起こし、口唇に朱、頭髮や眉には群青、衲衣は金泥地に截金文様を加えている。脇侍の瓔珞は群青と緑青で玉飾りをあらわし、宝冠部は裏箔を押して墨線で細部を描く。踏割蓮台は緑青地で、その輪郭と蓮弁に截金を用いている。飛雲は胡粉地に墨線の縁どりを加えている。本図は皆金色の薄い目の彩法で、各部に施される紗綾形や七宝をはじめとする文様の描写からみて、鎌倉時代後期の作と思われる。来迎図の中では異例の大幅で堂々たる風格を持ち、保存も良好である。また絹地が一幅一鋪の雄大な絹幅であることなどからも資料的価値が注目される。本図は大国魂神社の神主であった山名行阿が如来寺に寄進し、伝来してきたものである。また、明治四十三年(一九一〇)の本図修理の際に、割軸中から次のような以前の修理の銘が発見された。

応仁二年 戊子八月十五日修複之 俊雅

細工師乗仙客僧

天文六年 辛酉十月晦日 細工師京都人廣田与十郎 法名全高

奥州岩城矢野目如来寺十二代良璋本願敬白



木造阿彌陀如来及両脇侍像

三躯

指 定 明治三十六年四月十五日

所在地 いわき市内郷白水町広畑

所有者 願成寺

平安時代(十二世紀)

本尊像高 八五・五cm

観世音像高 一〇四・五cm

勢至像高 一〇二cm

阿彌陀如来は無量寿仏・無量光仏ともい、浄土を西方に建立して極楽と名付け、説法・利生に従事する。観世音菩薩と勢至菩薩は、阿彌陀如来を補佐する二脇侍で、左の観世音菩薩は慈悲門を、右の勢至菩薩は智慧門をつかさどるといふ。

白水阿彌陀堂の内陣には黒漆の須弥壇があつて、阿彌陀三尊と二天王の五軀が安置されている。本尊阿彌陀如来は寄木造りの坐像で、漆を塗つた上に金箔を押しあつたが、箔は落ちてわずかしが残つていない。肉髻・白毫があり、螺髪は小さめで良く整つている。ふくよかな頬、伏せがちな眼など、温雅なご尊顔は慈悲円満の相をあらわしている。肩から胸にかかる衲衣の線は流麗で、印は来迎印を結んでいる。腕の肉付けや、衣文の浅い彫りなどに藤原仏の特色を見ることが出来る。二重円相・飛天光背は透し彫りの雲文や唐草文があつて美しく、台座は七重の蓮華座で、宝相華文・藻文が彫つてあり、完成された姿を示している。光背・台座ともに当初からのものが完備している当代の工芸的遺品としても著名である。

脇侍の観世音菩薩・勢至菩薩の立像は、寄木造り、漆塗、金箔押の像である。本尊に比すればやや略式ではあるが、ふくよかな面貌、流麗な衣文、両脇の肉付き等、藤原仏の特色があり、指先の美しさは見る人を引きつける。唐草を透し彫りした輪光背があり、宝相華文等を彫つた蓮華座に立つている優雅な像である。作者は不詳であるが、像容は定朝の流れをくみ三尊ともに平安時代後期(藤原時代)の典型的な作品である。



木造文殊菩薩騎獅像

一 軀

指 定 明治三十九年四月十四日

所在地 いわき市四倉町葉王寺字塙

所有者 葉王寺

鎌倉時代(十三世紀)

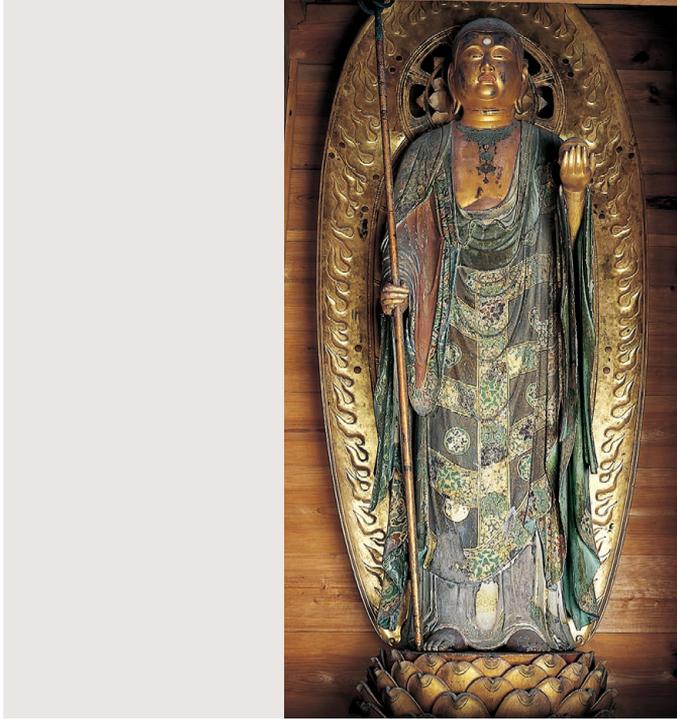
総高 一〇八・八cm、像高 四一・八cm

葉王寺は磐城の古刹で、新義真言の道場として中世に最も盛んであったが、明治元年(一八六八)の兵火にあい、堂宇・仏像・仏具等の多くが失われた。この像は、磐城平藩主・内藤義孝が元禄十六年(一七〇三)に、二十世日元法印のもとに寄進したものと伝えられている。

文殊菩薩は大智と大悲の力をそなえて、諸菩薩の最上位をしめ、清涼山に住み、仲間である諸菩薩一人人に説法したという。象に乗った普賢菩薩とともに、釈迦如来の脇侍を構成しているが、独立した一尊像として経蔵に安置されることが多く、本像も元々経蔵に安置されていた。

本来は右手に剣、左手に経巻を持っていたと思われるが、持物は失われ、獅子の背の蓮華座に趺坐している。なでつけるような髪型や衣服の形式は宋朝様式を表わし、やや写実的なスタイルは清潔ですっきりとした美しさを示している。大智を表現した理智的な尊顔は「文殊の知恵」の形容詞にもふさわしく、眼には玉眼が入っている。

筋肉の隆々たる四肢を台座に運び、左方斜に構える獅子の雄姿は口を開き力強く、もとは極彩色であったと思われるが、今は口の中に朱色を残すのみで、すべて剥げ落ちている。鎌倉時代末期の作と思われる。



木造地藏菩薩立像

一 軀

指 定 明治四十年五月二十七日

所在地 いわき市四倉町長友字大宮作

所有者 長隆寺

南北朝時代(十四世紀)

像高 一七六・五cm

地藏菩薩は切利天上に住し、釈迦如来の命を受けて毎朝禪定に入り、衆生の根機を観察し、釈迦入滅後は六道(地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天道)を巡って天上界から地獄までの間の一切衆生を教化する。観音と同様現世利益の仏で、物事に忍耐強く大地のように強い決断力を持っていることから地藏といわれる。

円い顔をし、新月のような、いわゆる地藏眉のやさしい童子姿の地藏尊は延命地藏とよばれ、外に子育て地藏・子安地藏があり童子とは関係が深い。

長隆寺の地藏菩薩は右手に錫杖、左手に宝珠をかかげもち、身には袈裟・衣・裳をまといて蓮華座に立ち、金色の舟形光背を負う像で、いわゆる声聞形である。肉身部には漆箔を施し、着衣には極彩色と截金で文様を描くが、これらはいずれも新補である。

本像は檜材、寄木造り、内刳りを施し、玉眼を嵌め入り、白毫に水晶をはめる。木寄せは厚い漆箔と彩色によって明確でない。着衣は厚着で重苦しく、衣文のさばきも繁雑となり、全体に太づくりである。制作はおそらく南北朝時代に入ってからと思われる。持物の錫杖には「大地蔵菩薩 長友之村、本願行海十穀、造工源十郎、永禄十二年(二五六九)六月一日」の刻銘がある。

鎌倉の円覚寺長老から贈られたと伝えられ、磐城平藩主・内藤義孝は本像を一時平城に移したが、貞享三年(二六八二)七月に返還した記録がある。また、この地藏菩薩が童子の姿となり、田の代かきを手伝ったという鼻取り地藏の伝説が残っている。



銅造阿弥如来及両脇侍立像

三躯

指 定 大正四年三月二十六日

所在地 東京国立博物館(寄託中)

所有者 いわき市

鎌倉時代・嘉元二年(三〇四)

中尊像高 四七・五cm

観世音像高 三三・三cm、勢至像高 三三・一cm

長野善光寺の秘仏本尊は、百濟からもたらされた我が国初伝の仏像と伝えられ、鎌倉時代の復古主義を反映して広い信仰を集め、各地でその模刻像が盛んに作られた。その様式は阿弥陀三尊が白形の蓮台に立ち、一つの光背を負っているので「一光三尊式」または「善光寺式」と称されている。

中尊阿弥陀像は、身に衲衣を通肩に付け、両足先を少し開いて白形の蓮台に立つ。脇侍の二菩薩像は、丈の高い宝冠を付け、ともに両手の掌を胸前にて重ねる梵相印を結び、白形の蓮台に足を少し開いて立っている。観世音像は化仏立像を、勢至像は宝瓶を宝冠に毛彫りしている。

光背は一光三尊形式のもので、丈も高く幅も広いものである。銅板をもってやや角張った蓮弁形に造り、覆輪と光脚とを付けて整形し、周囲には三四個の飛雲形に切った金銅板を銕止めしている。中央には金銅板を細く切った身光・頭光があり、頭光の中央には蓮華形に切った銅板、頭光と身光に蔭のごとくからみつつ上る、蓮華唐草を銕止めしている。三尊と光背には鍍金があるがかなり落ちてゐる。中尊の背面には嘉元二年(三〇四)の刻銘がある。

大工藤原国永

於相州鎌倉住吉谷令修復畢嘉元二年甲辰四月八日

願主沙弥蓮仏比丘尼真戒

本像は真戒比丘尼が鎌倉から奉持した仏像で、いわきの仏教史上重要な遺品である。



持国天立像(寺伝広目天像)・多聞天立像 二躯

指 定 昭和二年四月二十五日

所在地 いわき市内郷白水町広畑

所有者 願成寺

平安時代(十二世紀)

持国天像高 一〇一・八cm

多聞天像高 一〇〇・〇cm

四天王は仏教における四方鎮護の天部で、須弥山の中腹に住し東方・持国天、西方・広目天、南方・增長天、北方・多聞天と四方を守護する。白水阿弥陀堂においては四天王を安置したのではなく、平泉の中尊寺金色堂諸壇のごとく、須弥壇の前方左右に当初から二天のみを安置したのである。

持国天・多聞天ともに寄木造りで極彩色の像であったが、現在では彩色はわずかしか残っていない。開口忿怒の相ではあるが、鎌倉時代の像のような強さはなく、藤原期のやわらかさがある。持国天が左手をあげれば、多聞天は右手をあげ、両像は左右対称的に造られている。身に甲を着けて、腰をひねり、両袖をひるがえす。片足は天邪鬼の頭を、片足は背を踏まえ、容姿は動的表現に優れ軽快である。当初は手に矛や刀を持っていたが、現在は失われている。

阿弥陀三尊の静的な表現に対し、二天の動的な表現は、須弥壇上に静と動との巧みな調和をかもし出している。

平泉金色堂の内陣には藤原清衡・基衡・秀衡の三壇があるが、白水阿弥陀堂の五躯の仏像は初代清衡壇に様式的共通性が見られ、特に天部像の様式・手法に共通点が認められる。

阿弥陀三尊と共に藤原期の優れた芸術性を伝えている。